



第一集

甘雨亭叢書別集序
自雨亭
堀田益堂

亡友堀田益堂。天資英敏。頗好文學。與余為莫逆之友。知化而已。余叢書第一集成。益堂見之曰。予夙有志于斯矣。既輯錄一百餘卷。名曰明遠館叢書。今子書已成。則無復須予之舉。乃舉而附之於余。余嘉其虛懷無我。謂之曰。國家有用之書。以國字。

記之者極多。君盍輯而刻之。益堂首肯之。
於是余舉所藏國字書數十種以酬之。無
幾。益堂即世。其舉不果。豈不可惜哉。頃者
余錄叢書中官不允刊刻者數十部。名曰
叢書外集。又續而輯其係國字者。名曰贊
書別集。嗚呼。國字書之多。汗牛充棟。最難
取捨。余之謗陋。何以堪之。為之慨歎者久
之。益堂亦當拊膺于地下矣。

嘉永六年癸丑重三

節山 板倉勝明識



臣岡村政德謹書

甘雨亭叢書別集

第一集

病中湏佐美 一卷

上近衛公書 一卷

子姪禁俳諧書 一卷

日本養子說 一卷

非火葬論 一卷

父兄訓 上卷

古學先生和歌集 一卷

蕃山先生和歌一卷○附保侶巖之圖

飛驥山一卷

觀放生會記一卷

檜垣寺古瓦記一卷

人名考一卷

准后准三后考一卷

櫻之辨一卷

櫻品一卷

忠士筆記一卷○附鳩巢與白石論土屋主稅所置

湘雲瓊詰附錄一卷

病中以佐之方

病中湏优美

室直清 著

昔漢の文帝露臺を作りんと云々近々其價も云ひ
まへ一百金を費すを奉れ百金を中民十家の產
なり吾今其臺をつくる所で十家の產を費すと云ふと
了縁うは處事也やうやく其事今又青史を照
一季歳の多寡と云ふも今の大君御代をもろーめに初光
トリ聊まし色の御好おりまじに御身の掌控を事へーみハ
物トモ華美トリテ天下の考る財を惜すハトハ漢文景子

ハ哉トアサニ近ニ米價賤シテ下部も
凍餓の民多シ幸リキ菜色を免メトツアシモ豊年ホ後ミ米
價アリニ極シテ斯ルアリシテ微禄を賜ス羣臣其禄アリ
ト衣服以下の諸費をとて貯之テ用ヒテ以因窮ニ及バ
ノトと聞スルハ頻クよ賑恤の御政アリム背アリ太保
ノトムルハ自ア一世の風俗駭情シ取アリケリシハ考
核トムク唯奢侈を好ムシム富商大賈時勢ト參ヒテ貨利
の權を擅ムシムに諸の物價モアシムシム也ハ米價
はア俄シムシムハ是を亦ハ諸價を傍シテムシム又ウセ
先ニ今年トア徳素の令御定シテアシムシム急を調ヒ
ムシム去年徳月のあリテ先ニ有司ニ命ヒテ府庫の貰を發
シテ巨萬の金を散シテ御祿の當ナリシムシム恩倅トク下六
府史胥徒のホトシムシム誠シテトク御事トヒトテ今
トク後はムシム恩貸ニシテ一面ニ自躬トク身と脩免寺公ヒ脱
シテ御令ヲシテアシムシム傍シテ清糸モヒ替ヒテトク上ニ御恩慮主旁
シテ御恩ヲシテアシムシム當シムシム御恩の萬一を詫する
シテ志ナリテアソシテアシムシム當堂の主シムシム下ニ御恩慮主
シテ名トシムシム朝夕ト御心シケヌシムシム其ノトケテシム

於より多くして已を省みりて酒食ふたり推て來との
み好んで身を持芻して上の御恩をうかがひすまわへ
人をもとて人をやりくと禽獸よりぬつて志す
つて事なれば近年士の風儀りそり敗る廉耻のあらざ
參星はとくにハカルアメイミ人ほりと定む
ヨハ老のりゆゑんとく甚事を何とく深くなけさて徒も
ナシ物さすに筆まきくちとお仕くまつて此での系利
うじて世と利修つてスズノ人ほりと予を評く
世を戒るやリとん又世を詔とやリとん其評人のくまう
樓後ソソヌトハ賢ト一妻トソラハ姑トアマナリヤ
小ハ内トカチニ傷モリム所ノ所ノ辰享保辛亥年正月十三日
鳩巣老人後臺の草の庵より筆

甘雨亭叢書別期

病中頃佐美終

之江集

上近衛公書

柴野邦彦 著

近衛殿の内閣紀伊守源重敏、幕府へ遣使より
々於乎邦彦ハアリヤシムニシテ又アシヘトモ御上旨ナリ
ハシマリテアシムニシテ莫念福シテシトシノ崇高の位
位トモアシムリ下問ノ恥シタカシニ世アリテキリハ是
を芻蕘ノ向トマトマ又吐握の内勢トモアシシ浪シヤシ
シテアシムリケリ邦彦連絡の身トシテ端揆の御位不
居トモアシムシテ又アシムニシテアシムリテアシム

狄仁傑・元行仲と葉落の物語
厚き仰の赤き手書きの筆は、ゆきとて書
はりとまくに筆ぬ芋曝の体とて、故ゆかずく
あやめ(44)

人をほんまに公家ノ文選を以て、武富ハ武功を
アミタムヲ勿論のゆゑなり。犹中大臣折家のゆゑと
むゆくに傳義をかゝる。おもひく、朝家のゆゑ
ゆきとて、春秋公羊傳ニ孔父正色而
立於朝。則人莫敢過而致難。折其君考ニヤ文の執柄
三公ノんじゆの方徳を脩ん義とて、君乃
俗ゆくよしとて、ハヤシナリ。叛臣逆臣百萬貔貅の兵を卒
トゆく其人を蹈滅して考へる。弑逆與れりゆくいは
トゆく。其例和漢史ノハシ中ノメ漢
の代ゆくハ級豊・忠直セイハ吳楚七國の謀及メ叶
ハシ唐の代セイハ杜黃裳の清廉セイハ李師古ハ身
セメ勅一ゆくまか朝セイハ左衛門督光頼卿の存
ゆく。平治ノ帝ハ行馬もまたとふりゆくまゆ
汲豊杜黃裳光頼セイハ武畧智勇鬼谷黄石

秘術ゆきまつりすよりへ又狼狽る若秦楚燕趙の兵持
すよめりに死ハ病ゆほくも或ハ文墨のやうもすら
とくに人をもてぬ只一筋の忠直清廉ゆきりう
る暴逆叛乱の革衛青霍去病すらその智勇並佑
くる武略をひそめて彼のひそむらひそひの体の
徳義のひそむらひそ廣堂のよしやくへ衝と千里の折とよ
笏を端へく天下を泰山の安よむくか是かの事をあや
てよれ小ハ今抄家大ほの身ゆく おのほりゆくかな
くやまのよはせ身ゆく 義色よけくわゆひりゆく
抄家千尋のよあくひそ力重く胸くまびとく厚き
ひがくとくかくへ忠節は第一とくにゆくそえ打納く
ア怪謀秘策を運へ 朝家のゆくゆく仕へんちく事へ
武臣のゆくゆく業へく

君子所貴乎道考三動容貌。斯遠暴慢矣。正顏色。斯近
信矣。出辭氣。斯遠鄙倍矣。謫豆之事。有司存。と曾子
ゆくゆくをかく抄家大ほの身有職とくゆく之殿
舎の門をうちむ裂のを目下とくゆくの事へ有司存
と了諸司の官人をゆくの残掌をくむへるへり

甘雨亭草書別集

紫朱けの内をまわり賄ひ
てゆく男よりおもむくにあらわんかはつゝ人の方
よりすこし君の下よりあらわしをあらわす毛持
み彼其之子不稱其服とまへ是れの事より
ア馬鹿具の花やうに歩きゆく今や由りまつて
まづまづ鎧をまつてあらわんかすの絶足不比等のア
姿を窺ひゆがりシテハリのよ彼は公よりおと
いゆかれてとひまほ達をまつてはゆるゆりよ
一毛少やうにとまを擴家大臣の下に候るやう
身を脩め徳を立てるがんすがをとめまつてはゆる
ナリアリハ用の所をひきとめまつてはゆるのまつま
マツマツリ自のくまん少りうかとくとくとくとく
幻をめくらえまちまち文詮をすりんとくおはなうありま
レモレモレモレモ汗牛充栋と云ひてはまことに
豪文とぞとぞ文とぞとぞ一併事とぞとぞとぞとぞ
四書五經三禮 神紀ハチヨウカル
四書五經三禮 神紀ハチヨウカル

四書五經三禮の骨體をもとへたとて一考而の基をもとめ
あらわす本とや詩經書はれの事とぞとぞとぞとぞとぞ

ナニシテノ用ゆアリモアリヤアラシテハ末代後之の根
ナニシテ書シロハシテ後ノハナケヌ一ニヤ中庸易春秋ハ
衆経ヒテノウル上ノ四事ニヤニ高

小学近思錄性理諸書

布朝儒學の尊りは隋唐の學政が其の後漢唐の注疏と定められりて後元和の時科選の子孫となりし朝家の學政は古事記をもつて其の如くとて桃花坊禪閣をもつて其の如くとて其方の人のかゝるにまづい事とて以降の事とて唐土とて宋朝の初めまで帝王の御書校のあつた所とて小説の如きとて新編の事とて後ハ宋元明今と清朝小説とて代々の帝王とて會議とて他とてあらが是とて以只一つ小程朱のあらる崇き事とて事とてゆきとておはりとて小至る没とて後道をうなぐとて事とてゆきとて漢唐の諸儒の經を取て小剝詰章句のあらが是とてはるかに古明の人ハ久しくいたるに至り多ハ釋文を多く遺してあるに至り

甘雨書男集

の子孫と達洛の諸賢初々六経の中小釋老の源流
上下の事は多大なる事無く其事は一脉相承して以來
程朱の學を以てハ外の道を離れてハ古往の學を以て
此の既成の道を離れてハ天下萬世の淺薄空虚に
止むが如きは朝鮮後醍醐天皇の唐宋之學
の國に坐すかほじ事無く勿論の事より 朝家の子少政
府の事は少く有り少く有り少く有り改めて事無く
何處かの御室ハ朝家の事より少く有り少く有り
一脉の學を以て誠に程朱の説の人仰くうなひりやん葉欽
夫林道春やんうやゆ一脉の學を以て家の人ハ一脉は道尔
かひきりの事無く其事は一脉の學を以て家の人ハ武家地下人と
崇信するを傳承の人々の考へ年先も一脉の學を以て

歷史

二十一史八度博古今事讀出之以子之學而以一溫公通
鑑朱子綱目八歷代沿革真贗內跋考之以子之學而以此

五代史ハ歴史よりハ史記前後漢書唐書
宋史より代よりハ殊よりを以てくらべりや此外國於
唐鑑貞觀政要唐六典等有用の書ト有

經濟書類編書

杜祐通典文献通考ハ經説の要等に大學衍義并小
衍義補ハ修身治國の道經史歴史考證
文選

文集

名臣卷後陸宣公奏議家集ふ范文正公司馬溫公二程
朱文公等諸公の集次小ハ歐蘇二家の集をも涉獵
一ふりんすうじあくほんくわくほん

天明八年八月日

幕府儒貢紫邦彦頃首再拜記上

甘雨亭集

卷之三

子思林子仙社書

上近衛公書終

漫游记

成仁親王

極正員人

中興宮

宗貞盛人

上杉憲忠

長尾昌賢

分倍地

滿則人

則重人

則尚人

子姪禁俳諧書

成島鳳卿著

世ノ俳諧といへ事のり濫觴ハ連歌の流す所ノ無下
の凡卑チモノの詞をもくほくやまくとひそむるも
人ちあらゆのよきをだんとゆとりに入まく其席ノ身の
斧藻をもくともくとひそむるも知識のわざりとひそむるも
めりす世は人の子をとむとむ其おひよしもむい
らへやくちにちくハ遊君傾國のちくけふ間をされば
ぬくすゑんりくとひそむるもくとひそむるもくとひそむるも

甘雨亭草書別集

廿二史劄記

何をもとよりて有る事ハ注一卷は今ハ第とすトシテ和モ
是の名をぬきにシテアリトナニ事ハソウモリトシテ
ナセ古の事トシテ今先ヤニ事をアヒテ詩モロク事モ
アヒテ連教ヲアリ事ハヨイモリトモアヒテ詩モロク事モ
此道の考ナラ花の事アリトナニ事モロク事モ
ナヒテカナアリ事モロク事モロク事モロク事モ
只一时の裁アリ其モロク今の風氣モロクアリ事モ
モロクモロクアリ事モロク事モロク事モロク事モ
小伎保姫の春立アリ居尻アリトナヒテ詩モロク事モ
モロク秋連秋ムアリトソアリ其人乃梓の子矢立アリモ
ナヒテ利口アリトナヒテ連教のアリトナヒテ足立アリモ
ハサメキアリトナヒテ草綠の限アリトナヒテ足立アリモ
ナヒテアリトナヒテ草綠の限アリトナヒテ足立アリモ
風流の事ナリトナヒテ俗立アリトナヒテ風物トナヒテ文字トナヒテ
モモアヒテ用詩アリ六義アリ事アリトナヒテ足立アリモ
ナヒテアリトナヒテ用詩アリモアヒテ風雅頌モアリトナヒテ比賦興モアヒテ
ナヒテアリトナヒテ獨ハ正一きのうモアヒテ頌ハ徳モアヒテ
ト此内の一節三の二三義を何以モアヒテ小具アリモアヒテ

十雨亭詩集

了抑神明佛陀の御心をもて人よりすの無なづく。後
仰天也。天地をうかべ鬼神も表とせむるの道力もよい
也。而して感格きよへかのほもおれ又おほくらや廢暴を
もおこす。而して暴虎馮河のりよそぞなく盜跖を
もひそむ。而して周孔のいわばは傳す。おまくは善えはぢりのものとす。
威動ちよ事うむ哉。やうやく聖の道ゆくハ既
濟の風。佛のさうり法滅の財。代の文。すと
あはくともやきに何の冥感をうり。すと
すと今朝すひとく。すとく。すとく。すとく。すとく。すとく。
またたびく。嘗て風。とくとく。神のほく。とくとく。惠
の光。今とく。とくとく。とくとく。とくとく。とくとく。とくとく。
りとく。事すや。能く。游す。とくとく。とくとく。とくとく。とくとく。
淺慮盡側のりよとく。所すく。風雅とく。とくのハなまく。とくとく。
えの。塵。を云辭。とはほひと。筆かく。文采爛斑のうさく。は
夫毛碑と称く。金函をもとと。無鹽をもとと。西施を效く。
人情の因。はくはく。今も。殊無能をもとと。世人。不智。ひ
とくとく。とくとく。とくとく。とくとく。とくとく。とくとく。とくとく。
方。花。紅葉。もとく。とく。とく。五倫のすく。も。細ハ。うか

十一
附錄

背く千尋の御陰め冥助とやまじとひく佑くん穴く

芙蓉道人

我々の佛縁より事うなづけ
侍の御陰冥トテハ天ツ神國ツ神の御
背千尋の冥助をやうじゆく侍の穴

芙蓉道人



群馬県立図書館



0295132-5